『早稲田大学図書館紀要』第69号（2022年３月）

ジュネーヴにおける近代的書物形態の発展について

雪　嶋　宏　一

１．はじめに

今日、欧米で一般的に生産されている印刷本の形態は、表紙（カバー）、標題紙（タイトルページ, title page）、刊記（imprint）、目次（table of contents）、序文（preface）、本文（text）、挿絵・図版（figures, plates）、参考文献（reference）、索引（index）、ページ付け（pagination）等の要素から構成されている。これらの要素は、著者による本文のほかに、編集者、校訂者、翻訳者等が備える序文や解説文等のパラテキスト（paratext）、印刷者、編集者、出版業者が備える標題紙、目次、索引、ページ付け等からなるペリテキスト（peritext）に区別することができる[(1)]。このような構成要素からなる書物の形態を「近代的書物形態」（modern book-form）と呼ぶことにする。

これらの構成要素の多くは15世紀末までに印刷本に散発的に備えられた。これらの要素の中でこれまで研究が行われてきたのは、本文およびそれと関係が深いパラテキスト、標題紙や索引等についてである。例えば、初期の印刷本には標題紙はなく、本文を汚れから防ぐための白紙葉が備えられていたが、まもなくそこにタイトルの一部（ハーフ・タイトル half-title）を印刷して他と区別できるようにしたり、本文の内容を簡略に記載したりするようになった。さらに、1476年にヴェネツィアで刊行されたレギオモンタヌス（Regiomontanus, Johannes）『暦』（Kalendarium）ラテン語版

(ISTC ir00093000)・イタリア語版 (ISTC ir00103000) には、書名、著者名、目次が詩文として綴られ、その下に印刷地、印刷者、印刷年月（刊記）が印刷されているため、いわゆる近代的標題紙の要素が備えられたとみなされている[(2)]。しかし、このような標題紙は15世紀中には本書の他わずかな例しかない[(3)]。したがって、近代的標題紙の確立は16世紀以降であり、標題紙の発展にともなって中世の写本から引き継いだ書物の奥書（colophon）が徐々に消滅していった。

一方、近代的書物形態の重要な要素であるページ付け印刷については、1499年にヴェネツィアで最初に登場したことは知られているが、その後の発展過程はほとんど解明されておらず、16世紀中に発展・普及したとみなされているが[(4)]、実証的な研究は行われていなかった。ページ付が行われる以前の活版印刷最初期には印刷本にはまだ紙葉の順番を示す連続番号は印刷されず、イニシャルやパラグラフマーク等を朱書きする彩色職人であるルブリケータ (rubricator) が注文に応じて紙葉の順番を手書きしていた。1470年代には葉番号（フォリエーション foliation）が印刷されるようになるが、15世紀中に葉番号が主流になることはなく、1499年にページ付け印刷本が登場した。

このような点を考慮して、筆者は、ページ付け印刷の発展過程に着目して、いつ、どこで、だれが、どのような過程を経て近代的書物形態を発展させたのかという書誌学的テーマを実証的に研究している。

2．ページ付け印刷の調査方法

ページ付け印刷を調査する方法は、第一に、ヨーロッパで構築された16世紀印刷本の書誌情報データベースを利用して当時の主要な印刷出版地で刊行された書物を検索してページ付け本を探し出し、印刷出版地毎にページ付け本の数量と比率を算出して統計的な基礎データを作成することである。

16世紀の主要な印刷出版中心地として、イタリアではヴェネツィア、ミラノ、ボローニャ、フィレンツェ、ローマ、スイスではバーゼルとジュネーヴ、ドイツではシュトラスブルク、フランクフルト・アム・マイン、マインツ、ケルン、アウクスブルク、ニュルンベルク、ライプツィヒ、ヴィッテンベルク、フランスではパリとリヨン、低地諸地方ではレーフェン（ルーヴァン）とアントウェルペン、英国ではロンドンを選定した。

調査に利用した書誌データベースは、インキュナブラについてはIncunabula Short Title Catalogue（ISTC）を利用した。16世紀印刷本に関しては、イタリアについてはEDIT 16: Censimento nazionale delle edizioni italiane del XVI secolo、ドイツおよびドイツ語圏についてはVerzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des 16. Jahrhunderts（VD 16）、スイスについてはVD 16を基本としてe-raraも参照した。フランスおよび低地諸州（現代のオランダ、ベルギー、ルクセンブルク）の印刷本についてはUniversal Short Title Catalogue（USTC）、英国の印刷本についてはEnglish Short Title Catalogue（ESTC）、リヨンの印刷本についてはLYON15-16: Bibliographie des éditions lyonnaises 1473-1600（Lyon 15-16）、ジュネーヴの印刷本についてはBibliothèque de Genève, GLN 15-16（GLN 15-16）を利用した[(5)]。

印刷出版地の特定では複数の出版地が併記されている場合には、先頭に記述された出版地を基本とした。また、出版年では、多巻もので複数年にわたる場合には、それぞれのデータベースが特定している筆頭出版年を採用し、また出版年が不明な場合にはデータベースが示す推定年を採用した。印刷出版業者については複数業者の場合には筆頭業者を採用した。著者についても複数の著者の作品が収録されている場合にはデータベースが記述する筆頭の著者を採用した。

それぞれのベータベースの対照事項（collation）の記述方法は異なっている。VD 16ではページ付けがかなり詳細に記述されているが、EDIT 16では対照事項の記載がないものも散見され、さらに多巻ものは冊数のみの

記述となり、ページ付けか否かを判断できない。USTC では対照事項の記載がないものがかなり多い。ESTC は独自の記述方法を採用していて、ページ付けかどうか明らかでない記述が見られる。そのため、各地で刊行されている都市ごとの16世紀印刷本書誌や16世紀の印刷業者別の書誌等を参照して対照事項を確認した。

第二に、これらの主要な印刷出版地でページ付けを推進した印刷業者の刊本を現物調査して、どのような技術を用いて、どのような分野の書物をページ付け印刷したのか分析し、各業者の特徴を知ることである。印刷技術については書誌データベースには全く記載がないため、現物調査でその細部を知る必要がある。また、データベースでは対照事項不明な書誌については現物調査によって確認する必要があった。現物調査によって、書誌記述の間違いを少なからず見出し、さらにこれらのデータベースに登録されていない16世紀印刷本を発見することもできた。そして、近代的標題紙について調査して、印刷出版中心地におけるページ付け印刷本と近代的標題紙の結合とコロフォンの消長について確認して、近代的書物形態の成立の時期を考察した。

第三に、各印刷出版地のページ付け印刷の特徴を比較して、どのような地域でページ付け印刷が盛んになったのか、それは16世紀の社会文化的な状況とどのような関係があったのかを考察することである。

3．研究の経緯

研究の初期段階で、書誌データベースから抽出された主要印刷出版地のページ付け本を16世紀の前半と後半に分けて、各地におけるページ付け本の比率を比較して、全体の傾向を把握した。ページ付け本はヴェネツィアで1499年に始まり、バーゼルで盛んになり、リヨンで発展し、ケルン等のライン川流域都市に広がり、16世紀後半にはアントウェルペンで発展し、世紀末までにパリやロンドンで広まった。一方、イタリア、ドイツ南部お

よび東部ではページ付け印刷があまり発展しなかったことが判明した[6]。このような傾向に基づいて、最初のページ付け印刷がおこなわれたヴェネツィアおよびイタリアについて調査し、その影響を受けたバーゼルについて調査し、そしてバーゼルの影響を受けたリヨン、パリ、さらにケルン、アントウェルペンについて調査を進めることにした。

ページ付け印刷を最初に行ったのはヴェネツィアのアルド・マヌーツィオ（Manuzio, Aldo, 1450頃-1515）である。彼のページ付け本17版（うち13版がギリシア語書）を調査した。彼は3タイプのページ付けの方法を試みた。つまり、左ページ（verso）でヘッドライン左端、右ページ（recto）でヘッドライン右端にアラビア数字のページ番号を付与する型式（Aタイプ）、左右のページでヘッドライン中央にアラビア数字でページ番号を印刷する型式（Bタイプ）、左右両ページともヘッドライン右端にアラビア数字でページ番号を印刷する型式（Cタイプ）である。アルドはこれらの中からAタイプをもっともよく用いた。彼がページ付けを行った印刷本に使用された本文活字はローマン体、イタリック体、ギリシア語活字であり、ページ番号には最初からアラビア数字を採用した[7]。彼のページ付け印刷の影響はまもなくフィレンツェ、バーゼルに現れたが、イタリアではアルドのページ付けを継承・発展させる印刷業者はすぐには登場しなかった。

バーゼルでページ付け印刷を最初に行ったのはフローベン（Froben, Johann, 1460頃-1527）であった。彼はアルドのAタイプを採用して、エラスムス（Erasmus, Desiderius, 1466-1536）等の人文主義者の著作、ギリシア・ローマ古典、初期教父著作集をページ付け本で刊行した。フローベンのページ付け本はいずれもローマン体、イタリック体活字で本文が印刷されており、アラビア数字がページ番号に採用された。そのため、バーゼルのページ付け本の大半もローマン体またはイタリック体活字で印刷された人文主義書であった。一方、ゴシック体活字で印刷された宗教書・法学書ではページ付けは限られており、それらではページ番号にローマ数字が

採用された。つまり、書物の分野と本文活字がページ付けと関係していることが判明した。フローベンの影響でバーゼルの人文主義印刷業者はページ付けに熱心に取り組み、ページ付け本の比率が著しく上昇した。また、バーゼルではページ付け本に近代的標題紙が備わった早期の例は1523年であり、早い段階で標題紙が登場していたことが判明した[8]。

続いて、16世紀に最多のページ付け本が刊行されたフランスのパリとリヨンのページ付けの発展を調査した。フランス最初のページ付け本はリヨンで1510/11年に刊行されたアルド・マヌーツィオ刊行のローマ古典ホラティウス（Horatius Flaccus, Quintus, 前65-8）およびサルスティウス（Gaius Sallustius, Crispus, 前86-35/34）の海賊版であり、原本を模倣してページ付けが行われた。しかし、その技術がすぐにリヨンに広まったわけではない。リヨンでは人文主義書の出版を1528年から行ったグリフ（Gryphe, Sébastien, 1493-1556）がアルドAタイプでアラビア数字によるページ付けに積極的に取組み、リヨンで最多のページ付け本を刊行した。グリフの影響の下で他の業者もページ付けを盛んに行なったことでリヨンは16世紀ヨーロッパで最多のページ付け本を印刷していたことが判明した。一方、バーゼルからの影響の下でパリでは1519年にレシュ（Resch, Conrad, 1552歿）とヴィドゥエ（Vidoué, Pierre, 1543歿）によってページ付け本が初めて刊行され、ローマ数字のページ番号が印刷された。そして、1530年代にエチエンヌ（Estienne, Robert, 1503-59）とウェシェル（Wechel, Chrétein, 1554歿）がページ付けに取り組むが、他の業者は消極的であった[9]。

さらに、ケルンについて調査した。ケルンでは人文主義の影響のもとで1516年の聖バルバラ修道院内印刷所（Klosterdruckerei der Kartause St. Barbara）で最初のページ付け本が印刷された。そして、1521年からゾーター（Soter, Johannes, 1543歿）、フックス（Fuchs, Hero, 1556以前歿）等がページ付け本を刊行し、さらにギムニヒ（Gymnich, Johann, 1545歿）、16世紀後半にはクウェンテルの後継者（Quentel, Johann, (Erben)）、コリ

ヌス（Cholinus, Maternus, 1525-1588）、ファブリティウス（Fabritius, Walther, 1589歿）等の人文主義印刷業者がページ付け印刷に積極的に取り組んだ。1550年にページ付け本の比率は40％を超え、16世後半には70％に達して、ページ付け印刷の中心地に成長した。ページ付け本の著者としてはエラスムス等の人文主義者とキケロ等の古代の著述家の作品が大半を占めたが、一方で司教座都市としてカトリックの神学書や説教集も16世紀前半からページ付けで刊行された。ケルン最初の近代的な標題紙は1523年に登場したが、ページ付け本との結合は1524年であった[10]。

4．本稿の目的

以上のような研究の経緯の中で、リヨンとパリのページ付け本を調査している間に、スイス・フランス語圏のジュネーヴでページ付け印刷が16世紀後半に発展していたことを知り、ジュネーヴを新たに印刷出版中心地に加えて調査を行った。本稿ではその成果としてジュネーヴのページ付け印刷と近代的書物形態の発展について明らかにしたい。

16世紀のジュネーヴの印刷本の調査には、前述の GLN 15-16を利用した。スイスの印刷本の画像データベース e-rara は画像データのある本しか収録していないため、本調査では画像の参照に留めた。また、USTC にも最近ジュネーヴ印刷本のデータが搭載されるようになったが、GLN 15-16と比較して収録データ数に大きな差があるため、本調査では GLN 15-16を基本にして、USTC はデータの参照に留めた。

16世紀後半のジュネーヴの印刷本の大きな特徴は、ジュネーヴで印刷されたことを記すことなく「リヨン」等と虚偽の印刷出版地を記載する「海賊版」が少なくないことである。例えば、GNL 15-16で出版地を ‘Genève’ and ‘Lyon’ で検索すると172版がヒットする。GLN 15-16では虚偽の印刷出版地名の表示は《 》に入れて示し、本来の印刷地である Genève を［ ］に入れて記載している。また、印刷出版地が記されず、リヨン、ジュネー

ヴ近郊のモルジュ、バーゼル、さらにハイデルベルク、ケルン、パリ、アントウェルペン等の業者と共同で出版したとみなされる本も少なくない。出版地を記さない理由は、プロテスタントの著作をカトリック圏に流通させるための方策であったと考えられる。また、カトリック圏で公認されている古典については、フランスやライン川流域地方の大消費地で販売して利益を得るためであったと思われる。GLN 15-16では複数の出版地が推定される場合には［ ］に入れて地名を連記している。この場合には、ジュネーヴが筆頭印刷地であるデータを採用した。

なお、早稲田大学図書館にはパリとジュネーヴの16世紀印刷本が数点所蔵されているため、本稿の参考資料として図版を掲載して、本稿の読者の理解を深めたい。

5．ジュネーヴの印刷出版業の発展

ジュネーヴはスイス西部のレマン湖とそこから流れ出るローヌ川の南北両岸に跨る都市である。湖・河川の交通や陸路が東西南北に交差する交通の要所にあり、古くから商業都市として発達した。15世紀中葉までは定期的に大市が立って栄えたが、15世紀後半にリヨンに大市が認可されてからはジュネーヴの大市は衰退した。

ジュネーヴ最初の活版印刷所はドイツ中部ハイナ出身のシュタインシャバー（Steinschaber or Steinschauwer, Adam）によって1478年に開設された。彼は1480年までのわずかな活動期間に15版程を刊行した。続いてクリューズ（Cruse, Louis）が印刷所を開き、15世紀末までに60版程を刊行して、ジュネーヴ印刷業の中心的な役割を果たした。また、1493年にローザンヌで印刷業を始めたベロ（Belot, Jean）が1495年頃にジュネーヴに移転して1512年までジュネーヴ市の布告や聖務日課、ミサ典書等50版程を刊行した。1500年までにジュネーヴで刊行されたインキュナブラは108版ほどである（ISTC による）。

16世紀に入るとジュネーヴはサヴォア公国の支配から逃れるためにベルンの力を借りて1526年にベルン、フリーブールと兄弟都市同盟と相互援助条約を批准して政治的独立を勝ち取った。宗教改革派が優勢になったのは1536年であり、改革派のファレル（Farel, Guillaume, 1489-1565）とヴィレ（Viret, Pierre, 1511-1571）が神学者カルヴァン（Calvin, Jean, 1509-1564）をジュネーヴに招いた。カルヴァンは同年に主著『キリスト教綱要』（Christianae religionis institutio）初版をバーゼルで刊行した若手の改革派の神学者であった。しかし、ジュネーヴにおける宗教改革はすぐには進まず、1538年にカルヴァンは追放された。カルヴァンが再度ジュネーヴに呼び戻されたのは宗教改革が成就した1541年であった。以降カルヴァンは改革を進め、プロテスタント教育を整え、アカデミーを創設した。アカデミーの初代学長には、ローザンヌ・アカデミーのギリシア語教授であったテオドール・ド・ベーズ（Bèze, Théodore de, 1519-1605）が就任した。

16世紀前半のジュネーヴの印刷業は低迷していた。1516年から印刷業を開始したケルン（Koeln, Wygand）は都市の布告や政令の一枚刷りや小冊、カトリックの教義書等を刊行していた。宗教改革が進展した1536年以降はファレルやカルヴァンのフランス語の著作も手掛けた。GLN 15-16によれば、ケルンは1549年までに69版を刊行しており、16世紀前半のジュネーヴの印刷業の中心にいた業者であった。一方、ファレルの招きに応じて1536年にイタリアのピエモンテからジュネーヴに亡命した改革派のジラール（Girard or Gérard, Jean, 1558歿）が印刷業を開始し[11]、フランス語訳新約聖書やカルヴァン、ファレル、ヴィレ、オキノ（Ochino, Bernardino, 1487-1564）等の改革派の著作を盛んに刊行した。ジラールがどこで活版印刷術を修得したのか詳らかでなく、ページ付け印刷をどこで学んだのか明らかでない。GLN 15-16には彼の印刷書が305版登録されており、16世紀前半ジュネーヴの最大の印刷業者となった。

ジュネーヴでは1550年からは毎年50点以上が刊行されるようになった。1550年からの出版点数の急増は、パリからジュネーヴに亡命した改革派の

印刷業者バード（Bade, or Badius, Conrad, 1520-62）やロベール・エチエンヌ（Estienne, Robert, 1503-59）、改革派法律家から印刷業者に転職したクレスパン（Crespin, Jean, 1520-72）等によってもたらされた。ジュネーヴの「住民簿」によれば、1549年から60年に至る11年間で、イタリア、フランス、スイス国内、英国からプロテスタントが約5,000人も亡命している。彼らの扶養者を含めれば6,000人にも上ったと言われる[12]。そして、1551年から1559年までにジュネーヴに亡命した印刷業者は62人、書籍業者は72人である[13]。1550年から1564年までにジュネーヴで活動した印刷業者および書籍業者は300人にも及んだ[14]。亡命者は出身国別にコロニーを形成して各言語の書物を出版した。中でも1560年に英国から亡命した印刷業者ホール（Hall, Rowland）が刊行した英訳聖書（ジュネーヴ版聖書）（GLN-2137）は著名である。

亡命印刷家の中で注目される業者はロベール・エチエンヌである。彼はフランスを代表する人文主義の学匠印刷家として成功し、1540年代に国王の印刷家に上り詰めたが、異端の嫌疑をかけられたため、1551年に一家でジュネーヴに亡命した。ジュネーヴでは自著とともにカルヴァンの著作を積極的に印刷し、さらにラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、フランス語聖書を校訂して出版した。とりわけ1553年刊行のフランス語訳聖書は、初めて聖書の各書に節の番号を付与した版であり、その後の聖書の模範となった。彼はジュネーヴで60版程を刊行して亡くなった。

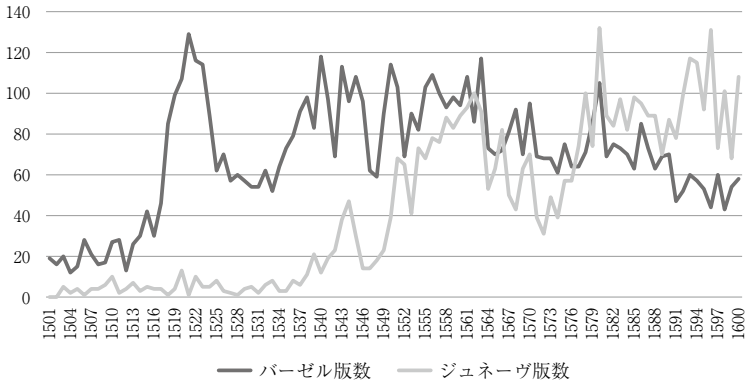
ジュネーヴでは1560年に印刷業者のギルドが初めて創設され、印刷業はジュネーヴ最初の輸出産業となり[15]、ジュネーヴの印刷本がヨーロッパ各地に流通するようになった。ジュネーヴでは改革派の著作と各国語訳聖書、新約聖書、聖書各編、そしてクレマン・マロ（Marot, Clément, 1496-1544）がフランス語に訳し、ベーズが完成させた旧約聖書の詩篇歌が盛んに出版された。リヨンの改革派の書籍商アントワーヌ・ヴァンサン（Vincent, Antoine, 1500頃-1568）は1559年にジュネーヴに移転し、1561年と1562年に詩篇歌を大量に出版した。詩篇歌はジュネーヴだけでも27,400部

も印刷されたという。さらにリヨン、パリ、アントウェルペンでも出版された[16]。

1564年にカルヴァンが亡くなると、カルヴァンの著作の出版も下火になった。この時期にはロベール・エチエンヌの息子アンリ２世（Estienne, Henri II, 1528頃-1598）が古典学の学識を存分に発揮して、プラトン、プルタルコス、ホメーロス、ヘロドトス等のギリシア古典の校訂・出版に専念して、人文主義書の出版を精力的に行った。彼が1572年に編集・刊行した『ギリシア語宝典』（Thesaurus graecae linguae）はギリシア語辞典の金字塔として今日でも利用価値がある。1576年以降ジュネーヴは出版点数がバーゼルを凌駕して、スイス第一の印刷出版都市となった（図１）。

1580年代以降はリヨンの大印刷出版業者セバスチャン・グリフ（Gryphe, Sébastien, 1493-1556）の息子アントワーヌ・グリフ（Gryphe, Antoine, 1527-1599）がジュネーヴの印刷業者に出資して「リヨン」という地名を記して出版を行った。また、リヨンの有力印刷業者であったトゥルヌ２世（Tournes, Jean II de, 1539–1615）が1586年にジュネーヴに亡命して、古典を中心に出版を行った。彼はジュネーヴにあっても「リヨンにおける国王の印刷家」（imprimeur du Roy à Lyon）という称号を使い続けた。

図１．16世紀バーゼルとジュネーヴの出版点数の推移



6．ジュネーヴにおけるページ付け印刷の発展

GLN 15-16には16世紀ジュネーヴ印刷本が4,338版収録されている[17]。これらの版の中でページ付け本とみなすことができる版は2,902版あった。ジュネーヴで最も早いページ付けの記述は、1516年にケルンとミショー（Michault, Pierre）が刊行した『輝ける処女マリアの詩篇集に関する敬虔なる信心会の書物と命令』（Livre et ordonnance de la devote confrairie du Psaultier de la glorieuse vierge Marie）（GLN-5796）に見られる ‘23, [1] p.’ である。本書を e-rara の画像で確認すると（http://dx.doi.org/10.3931/e-rara-6999）、本書の上部余白がカットされていてページ番号は全く確認できない。16世紀前半にゴシック体活字で印刷された書物にはページ付けがあまり行われていなかった点を考慮すると[18]、本書にページ付けが行われたとみなすことは困難であり、対照事項の記述の誤りと考えられる。また、1536年にケルンが刊行したデネチエール（Marie d’Ennetière）『ジュネーヴ市の戦争と解放』（Guerre et deslivrance de la ville de Geneve）の対照事項にも ‘23 p.’ という記述が見られる（GLN-1313）。しかし、本書は現存しないためページ付けの確認は不可能である。ケルンは1536年にもすべてゴシック体活字で印刷しており、ほとんどの版では葉番号すら付与していないことから、本書のみページ付けを行う理由は見当たらない。しがって、本書もページ付け本とみなすことができない。ケルンのこれら 2 点はページ付け本から除外した。

実際のジュネーヴ最初のページ付け印刷本は、1536年にジラールが刊行したフランス語訳『新約聖書』（Le nouveau Testament de nostre Seigneur et seul sauveur Jesus Christ） 2 版である（GLN-5, 6）。e-rara の画像（GLN-5）によって、本文はローマン体活字で印刷されており、アラビア数字のページ番号がアルドの A タイプで印刷されていることが確認できる[19]。なお、管見の限り本書はフランス語訳『新約聖書』の最初のページ付け本である。ジラールの出身地のピエモンテ周辺ではまだ当時ページ

付け印刷が行われていないため、彼のページ付け印刷技術の由来は明らかでない。彼は1561年までに162版のページ付け本を刊行して、ジュネーヴのページ付け印刷の基礎を形成した。多くの印刷出版中心地ではページ付け印刷の開始は人文主義書の刊行を契機にするが、ジュネーヴは改革派の書物の刊行に始まる。この点はジュネーヴの大きな特徴である。

ジュネーヴで1549年までにページ付けを行った印刷業者はジラールの他に、ミシェル（Michel, Jean）（16版）、デュ・ボワ（Du Bois, Michel, 1561歿）（12版）だけである。ミシェルは、ヌーシャテルに移住したリヨンの改革派印刷業者ヴァングル（Vingle, Pierre de, 1495頃-1536）の印刷工であり、ヴァングルの死後、印刷機材を継承してジュネーヴで印刷所を開設した。彼は1544年までにフランス語聖書やファレル、ツヴィングリ（Zwingli, Huldrych, 1484-1531）、ルター（Luther, Martin, 1483-1546）、ブーツァー（Bucer, Martin, 1491-1551）等の改革派の著作のフランス語訳をページ付けで印刷した。デュ・ボワは1540-41年に改革派の著作と初期教父の著作をページ付けで出版した後、リヨンに移住して1557年までジュネーヴに帰国できなかった。

16世紀前半はジュネーヴの出版数が少ないためページ付け本も数点に過ぎないが、その分ページ付け本の比率が高くなってしまう。実際のページ付け印刷の発展は1550年以降となる。1550年以降は新たに亡命してきた印刷業者がページ付け印刷を積極的に行った。中でもロベール・エチエンヌとその息子アンリ２世やコンラード・バードはパリでビュデ（Budé, Guillaume, 1467-1540）等の人文主義書やギリシア古典の印刷に従事していて、すでにページ付け印刷に優れた技術を持っていた（図２）。また、パリで弁護士となり改革派に傾倒したクレスパンは1548年にジュネーヴに亡命し、バードの援助で印刷所を開設した。したがって、クレスパンの印刷技術はバードに依拠していたと考えられる。ジュネーヴのページ付け本は1550年以降毎年50％を超え、1551年には早くも78％に達している（図３）。そして、1600年に至るまでほぼ60～80％の間を推移しており、ジュネーヴではペー

図２．パリで刊行されたページ付け印刷本

GVLIELMI BVDAEI,
Consiliarii Regii libellorúm-
que magistri in Prætorio,
Forensia.

LVTETIAE,
Excudebat Roberto Stephano typographo Regio,
Conradus Badius.
M. D. XLVIII.

Ex Priuilegio Regis.

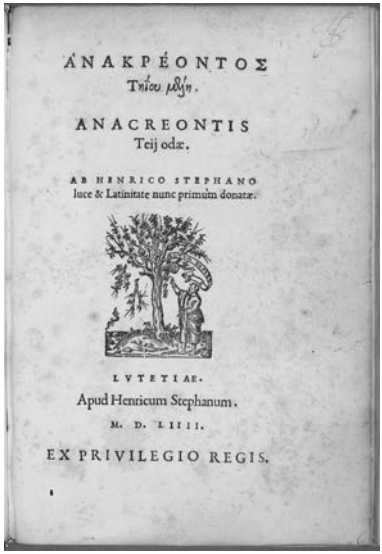
5

Gulielmi Budæi, Consiliarii Regii, libellorúmque magistri in Prætorio, Forensia.

CARDINEM causæ in aliquo ponere aut constituere. Vtroque enim Quintilianus vtitur. Est autem Cardo causæ, ipsius causæ firmamentum. Quæ singula non iunant, vniuersa profunt.
Imperium inhibere. Exercere actum iudicatur.
Dirimere controuersiam, est finem imponere controuersiæ, quod Vsuare vernacula lingua vocat. Cicero 1. Officiorũ. Quo magis teptehẽdidos Callipponem & Dinomachum iudices, quisse controuersiam dirempturos putauerunt, si honestatem cum voluptate, tanquam hominem cum pecude copulauissent. Sic dirimere litem. Vlpia. Possunt ipsa intra quæ quis litem dirimere iussus est, prorogari. Sic acies & iras Sabinæ diriminunt inter socerros & generos. Dirimere sententias eorum qui in lite iudicanda affuerunt, est Numerare & componere inter se sententias eodem pertinentes, & numerum numero comparare, & si opus fuerit, diuidere. Hoc est, si tertia se pars sententiarum numero minima, quæ ad alterorum propius accedere videatur. Vulgo, Ad concordiam redigere opiniones vocant, & summam colligere. Vt Dirimere suffragia. Varro libr. 3. de re Rust. Vti (inquit) dum dirimentur suffragia, vilicæ vrantur vmbraæ. Id est, dum ex summis suffragiorum collectis, constituetur quis plurima puncta tulerit. In vetustioribus tamen codicibus legitur diribere. De iure autem diuidendarum sententiarum: in Annotationibus in Pandectas plenè diximus ex epistola quadam Plinii oratoris.
Ire ad inquirendum de re controuersia, & Inquirere, Faire l'enquestre, & Inquisitor, qui inquisiuit.
Intercessioni parere, Surseoir l'exploict. & Intercessionis edendæ causa diem dicere, Affuger iour pour dire.
Iusta tibi possessione decedo. Id est, facio te possessorem.
Comitium, vulgo Castelletum vocatur Parisiis: & quocunque nomine alibi forum iudiciale vocetur. Comiciales caudici & cognitores. Du Chastelet, & Formula comitialis.
Expositiones causarũ sinuosæ, & alte repetitæ, Légs plaidoyers. Et Actiones caudidiciorũ comperdiosæ, & recta ad summã quæstionẽ progredientes. Alterocãdi vices legitimæ ad tertiasuõ, ꝓducẽtur. Id est, nõ triplicare licet.
Falsi peculiare instrumentum, Mainteur faulx. Et instrumentum falsi comperum & comisibum.

a iii.

２－１　ロベール・エチエンヌとコンラード・バードが共同で刊行したギヨーム・ビュデ『法廷』（Budé, G., Consiliarii regii libellorumque magistri in praetorio, forensia. Paris, 1548. folio）、標題紙と本文 p. 1（早稲田大学図書館所蔵［文庫21 X0278］）



ΑΝΑΚΡΕΟΝΤΟΣ
Τηΐου ᾠδαί.

ANACREONTIS
Teij odæ.

AB HENRICO STEPHANO
luce & Latinitate nunc primùm donatæ.

LVTETIAE.
Apud Henricum Stephanum.
M. D. LIIII.

EX PRIVILEGIO REGIS.

2 ΑΝΑΚΡ.

Εἰς γυνάικας.

Φύσις κέρατα ταύροις,
Ὁπλὰς δὴ ἔδωκεν ἵπποις,
Ποδωκείαν λαγωοῖς,
Λέουσι χάσμ' ὀδόντων,
Τοῖς ἰχθύσιν δὲ νηχὸν,
Τοῖς ὀρνίοις πέταδαι,
Τοῖς ἀνδράσι φρόνημα.
Γυναῖξιν οὐ τί ἔτ' ἔργον.
Τί σοῦ δίδωσι. κάλλος,
Ἀντ' ἀσπίδων ἁπάντων,
Ἀντ' ἰσχύων ἁπάντων.
Νικᾷ ὃ καὶ σίδηρον
Καὶ πῦρ καλὴ ἓς οὖσα.

Εἰς ἔρωτα.

Μεσονυκτίοις ποθ' ὥραις,
Στρέφεται ὅτ' ἄρκτος ἤδη
Κατὰ χεῖρα τοῦ Βοώτου,
Μόλων ὁ φῦλα παντα

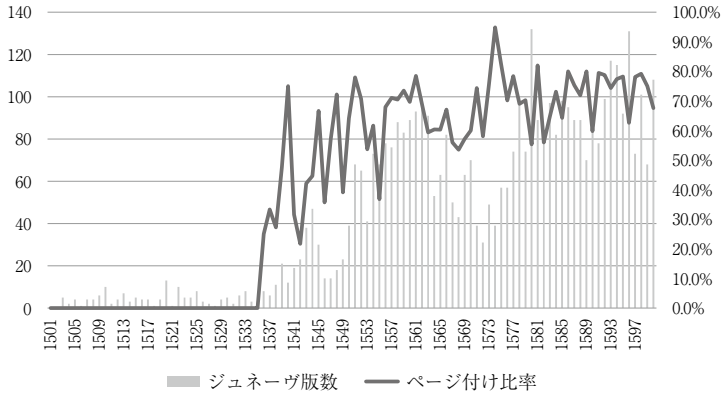
ΜΕΛΗ. 3

Κἀκεῖνα πάντα δαιδάλωτα,
Τότ' ἔρως ὀπισθίου μου
Θυρέων ἐκοπὴ ὀχῆας.
Τίς, ἔφην, θύρας ἀερίσας
Κατὰ μεθ' ἡσυχίας ὀνείρους.
Ὁ δὴ ἔρως, ἀύσας, φησί,
Βρέφος εἰμί, μὴ φόβησαι.
Βρέχομαι ὁ, κἀστιλβων
Κατὰ νύκτα πεπλάνημαι.
Ἐλέησα τοῦτ' ἀκούσας·
Ἀνὰ δὴ εὐθὺ λύχνον ἅψας,
Ἀνέῳξα. καὶ βρέφος μὲν
Ἔσω, φέρον τε τόξον,
Πτέρυγας τ' ἐφαίνετο.
Γ' ἀρα δὴ ἱστίον καθίσας,
Παλάμαισι χεῖρας αὐτοῦ
Ἀνέθαλπον, ὃν ὁ χαίτης
Ἀπέθλιβον ὑγρὸν ὕδωρ.
Ὁ δὴ ἐπεὶ κρυὸς μεθῆκε,
Φέρε, φησί, πειράσω μιν·

A 2

2－2　アンリ・エチエンヌ２世がパリで刊行した『アナクレオン抒情詩』（Anacreontis teij odae。Paris, 1554. 4to）標題紙と本文 pp. 2-3（早稲田大学図書館所蔵［F991 00547］）

図３．ジュネーヴの出版点数とページ付け本の比率



ジ付けが普及したとみなすことができる。ページ付けのない印刷本としては、１枚刷り、布告や政令等の数葉の小印刷物、そしてコラム番号が採用されたローマ法大全（Corpus juris civilis）であり、大半の書物にはページ付けが行われた。

７．ジュネーヴでページ付け印刷を積極的に行った印刷業者

この時期にページ付け本を刊行した印刷出版業者は枚挙に暇がない。ページ付けを特に積極的に行った主な印刷業者を表１に示す。1550年からジュネーヴで印刷所を経営したクレスパンが１位であり、クレスパンと共同出版を行ったバードが10位、またクレスパンとジャン・リヴリ（Rivery, Jean, 1565歿）のもとで修業したストゥール（Stoer, Jacob, 1542-1610）が２位、クレスパンの娘と結婚してクレスパンの伝統を継承したヴィニョン（Vignon, Eustache, 1588歿）[20]が３位、ヴィニョンの後継者（Héritiers d'Eustache Vignon）が６位、ロベール・エチエンヌの息子アンリ２世が４位であり、パリの印刷書籍業者ポンセ・ル・プロー（Le Preux, Poncet）の息子で1563年にジュネーヴに亡命したジャン・ル・プロー（Le Preux,

表１．16紀後半ジュネーヴの主なページ付け印刷業者

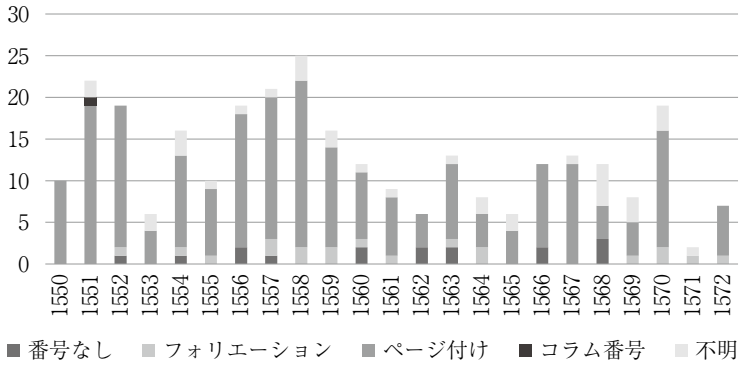
順位	印刷業者	ページ付け期間	ページ付け版数	全版数	比率
1	Jean Crespin	1550-1572	333	409	81.42%
2	Jacob Stoer	1573-1600	272	356	76.40%
3	Eustache Vignon	1573-1588	241	337	71.51%
4	Henri II Estienne	1556-1598	172	208	82.69%
5	Jean Le Preux	1561-1600	167	208	80.29%
6	Héritiers d'Eustache Vignon	1589-1600	86	114	75.44%
7	Pierre de Saint-André	1573-1599	83	105	79.05%
8	Jean II de Tournes	1586-1600	76	102	74.51%
9	Jacques I Chouet	1577-1600	73	135	54.07%
10	Conrad Badius	1555-1562	64	87	73.56%
11	Guillaume de Laimarie	1577-1596	63	96	65.63%
12	François Le Preux	1580-1600	60	75	80.00%
13	Jean Girard*	1550-1561	58（162）	305	53.11%
14	Jean Durand	1557-1585	53	112	47.32%
15	Antoine Blanc	1586-1598	51	75	45.54%

＊ジラールの数値「58」は16世紀後半の版数、「162」は彼のページ付け本のすべての数。比率は全版数で算定。

Jean, 1532頃-1609）が５位、彼の兄弟フランソワ（Le Preux, François）[21]が12位、カルヴァンの遠縁にあたるサンタンドレ（Saint-André, Pierre de, 1555-1624）が７位であり、彼らが仕事上密接に繋がっていたことがわかる。彼らの中でも特にページ付け本の比率が高いのは、クレスパンの81.42%、アンリ２世の82.69%、ジャン・ル・プローの80.29%、フランソワ・ル・プローの80%である。つまり、ジュネーヴでは多くの印刷業者がページ付けを積極的に取り入れて面的な広がりができたことで、ページ付け印刷の急速な発展につながったとみなすことができる。

彼らの中で最多のページ付け印刷を行ったクレスパンについて、ジルモン（Gilmond, Jean-François）の書誌[22]に基づいて編年順にページ付けの版数を算出した（図４）。1558年には25点を刊行し、そのうちページ付け本

図４．クレスパン印刷のページ付け本の割合



が20点を占めた。彼はローマン体活字を用いて、アルドのＡタイプを主に採用し、ページ番号にアラビア数字を採用した。クレスパンは印刷業を始めた最初からほとんどの刊行書にページ付けを行っていたことが判明する。彼がページ付けをしなかった本は、聖書（ただし、『新約聖書』と『詩篇集』はページ付けがある）、小冊『ギリシア語アルファベット』（Alphabetum graecum）、『ギリシア・ラテン語辞典』（Lexicon graeco-latinum）等であった。

８．ジュネーヴのページ付け本の著者について

次に、ジュネーヴのページ付け本の主な著者および統一タイトルを表２に示す。表２に列挙した人物の中で16世紀の同時代人のほとんどは改革派であり、多くがジュネーヴに亡命あるいは滞在した人物である。表２の1-4, 7, 12, 14, 17位の人物が改革派指導者および神学者・牧師である。9, 11, 15, 18, 20位の人物が人文主義者と古代ローマの著者キケロである。5, 6, 10位が統一タイトルである。8, 13, 16, 19位の人物はその他の学者、詩人である。

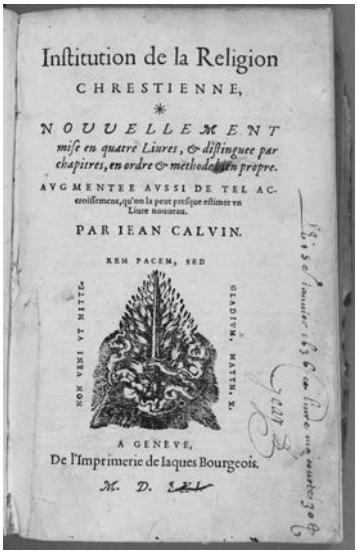
改革派の指導者および神学者・牧師としてはカルヴァンが筆頭である。

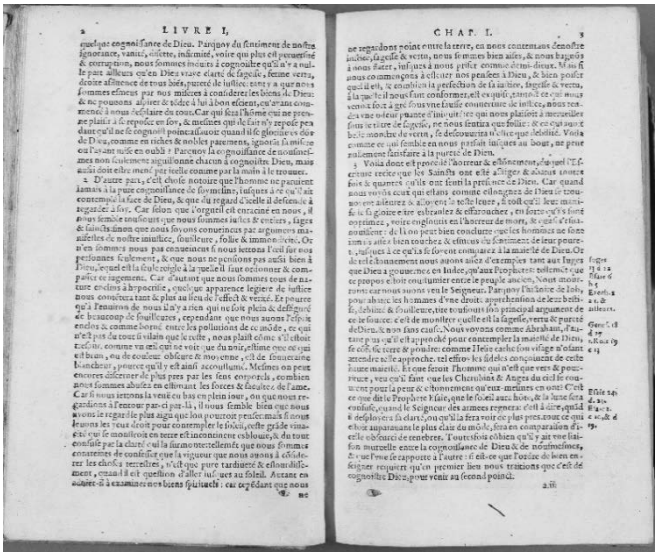
表２．ジュネーヴのページ付け本の主な著者および統一タイトル

順位	著者および統一タイトル	全版数	ページ付け版数	比率
1	Calvin, Jean, 1509-1564	431	338	78.42%
2	Bèze, Théodore de, 1519-1605	211	181	85.78%
3	Viret, Pierre, 1511-1571	97	78	80.41%
4	Daneau, Lambert, 1530-1595	83	63	75.90%
5	Corpus juris civilis	122	57	46.72%
6	Bible. A.T. Psaumes (français)	146	54	36.99%
7	Chandieu, Antoine de, 1534-1591	60	48	80.00%
8	Hotman, François, 1524-1590	56	48	85.71%
9	Estienne, Henri II, 1528-1598	59	48	81.36%
10	Bible. N.T. (français)	99	39	39.39%
11	Cicero, Marcus Tullius, 前106-43	51	39	76.47%
12	Bullinger, Heinrich, 1504-1575	43	35	81.40%
13	Mornay, Philippe de, dit Du Plessis-Mornay, 1549-1623	33	30	90.91%
14	L'Espine, Jean de, 1506-1597	28	27	96.43%
15	Sleidanus, Joannes, 1506-1556	52	26	50.00%
16	Du Bartas, Guillaume de Salluste, 1544-1590	25	25	100.00%
17	Marti, Benedikt, dit Aretius, 1505-1574	28	21	75.00%
18	Goulart, Simon, 1543-1628	50	21	42.00%
19	Gentillet, Innocent, 1535-1595	21	20	95.24%
20	Scaliger, Jules César, 1484-1558	22	20	90.91%

カルヴァンは16世紀ジュネーヴで著作が最も多数刊行された著者であり、全431版のうち78.42％にあたる338版がページ付け本である（図５）。カルヴァンのページ付け本はジュネーヴの大半の印刷業者が手掛けたが、その中でもクレスパンが72版、ジラールが70版と抜きんでている。２位のベーズはカルヴァンを継いでジュネーヴの改革を指導した人物で、彼の著作211版のうち85.78％の181版がページ付け本である。ベーズのページ付け本は、ヴィニョンが54版、ジャン・ル・プローが27版、クレスパンが26版

図５．ジュネーヴでページ付け印刷されたカルヴァンの主著『キリスト教綱要』カルヴァン自身によるフランス語訳、1561年刊（Calvin, J. Institution de la religion chrestienne. Genève : Jacques Bourgeois, 1561. 8vo）標題紙と pp. 2-3（早稲田大学図書館所蔵［文庫22 01464］）。フランス語訳初版は1541年デュ・ボワ刊行。





刊行した。3位のヴィレはファレルとともにジュネーヴの宗教改革を進めた人物で、97版のうち80.41％にあたる78版がページ付け本である。4位のダノーは神学者であり、83版のうち75.9％にあたる63版がページ付け本である。7位のシャンデューは法律を学びつつ改革派に傾倒して、ジュネーヴで神学を修めてフランスで牧師となったが、ローザンヌに逃れた神学者で、60版中80％がページ付け本であった。12位のブリンガ―はツヴィングリを継いだチューリヒの宗教改革者である。彼の著作はチューリヒを中心に刊行されたが、ジュネーヴではそのフランス語訳が43版刊行され、81.4％の35版がページ付け本であった。14位のレスピーヌも改革派の神学者、17位のアレティウスはベルン・アカデミーのギリシア語、ヘブライ語、神学・哲学教授となった改革派の神学者であった。

統一タイトルでは、5位の『ローマ法大全』(Corpus juris civilis) がジュネーヴで122版刊行されるが、リヨンの書籍業者の組合（la Compagnie des libraires）の出資が多い。大半の『ローマ法大全』ではコラム番号が採用されており、それらの中に途中でページ付けを採用した版やページ付けのみの版が識別された。『ローマ法大全』のページ付け本のうち、15版がストゥールによって刊行され、そのうち11版はリヨンの書籍商オノラ（Honorat, Barthélemy, 1589歿）の出資であった。また、ヴィニョンの単独版が14版、彼の後継者が4版刊行した。6位の旧約聖書『詩篇集』（フランス語訳）は上述したプロテスタント向けにマロが翻訳した『ダヴィデ詩篇集』と『詩篇歌』であり、多くの版でフォリエーションが採用され、ページ付けはむしろ少数である。10位のフランス語訳『新約聖書』はカルヴァンの従弟オリヴェタン（Olivétan, Pierre Robert, 1506頃-1538）が翻訳した版が多数を占めるが、ルフェーヴル＝デタープル（LeFèvre d'Etaples, Jacques, 1455頃-1537）訳も含まれている。

人文主義者では、9位のアンリ・エチエンヌ2世は上述のように16世紀後半を代表する人文主義印刷家であり、学者として古典の校訂と古典学研究を著した。ジュネーヴ刊行の59版中48版がページ付け本であった。11位

は古代ローマの哲学者キケロの著作であり、51版のうち76.47％がページ付けで刊行された。しかし、他の都市と比べてジュネーヴでのキケロの出版点数は少ない。15位のスレイダヌスは歴史書に人気があり、52版中ページ付け本が26版で、そのうち９版はクレスパンが刊行した。18位のグラールは人文主義者であり、ジュネーヴで説教者として活躍したことで著作が50版刊行され、そのうち21版にページ付けが行われた。20位のスカリゲルはフランスで活躍したイタリア出身の古典学者である。彼は改革派ではないが22版刊行され、20版がページ付け本であった。

その他の著者としては、８位のフランソワ・オトマンはカルヴァンに傾倒した改革派の法学者であり、法学、政治学、歴史学の著作を著し、法学史を繙いて絶対王政に反対した学者で、56版中48版がページ付本である。13位のモルネは政治家の論客であり、16位のデュ・バルタスは詩人であり法律家、19位のジェンティーユは法律家であった。

ジュネーヴではページ付け本の上位をプロテスタント指導者、神学者の著作が占めていた。他の印刷出版中心地では人文主義書のページ付けが顕著であったことを考慮すると、この点がジュネーヴの大きな特徴である。

９．ジュネーヴにおける近代的標題紙の登場について

GLN 15-16の書誌には標題紙における刊記の記述内容（Adresse sur la page de titre）と奥書の記述内容（Colophon）が記録されている。また、標題紙の画像が添付されたデータが少なからずある。コロナ禍で現地での現物調査ができないため、この情報を頼りにしてジュネーヴにおける近代的標題紙について言及しよう。

16世紀前半のジュネーヴでは標題紙にタイトルと出版年のみを印刷することが一般的であり、著者名も刊記も記載しない本が多かった。ところが、1536年にジュネーヴで印刷業を開始したジラールは1538年に刊行した教育者ハイデン（Heyden, Sebald, 1499-1561）の著作『唯一の仲介者について』

（D'ung seul mediateur）の標題紙にタイトル、聖書の一節の引用、そして'Imprimé à Genéve par Iehan Gerard. | M.D.XXXVIII.'（1538年ジャン・ジラールによりジュネーヴで印刷）という印刷地、印刷者名、印刷年からなる刊記を印刷した（GLN-1322）。しかし、著者名を記載せず、本文には葉番号もページ番号もなかった。なお、本書にはコロフォンがある。ジラールは1539年には王妃マルグリット（Marguerite d'Angoulême, reine de Navarre, 1492-1549）『鏡』（Miroir）の標題紙に著者名、書名、同様な刊記を印刷したが、やはり葉番号もページ番号もなかった（GLN-1334）。

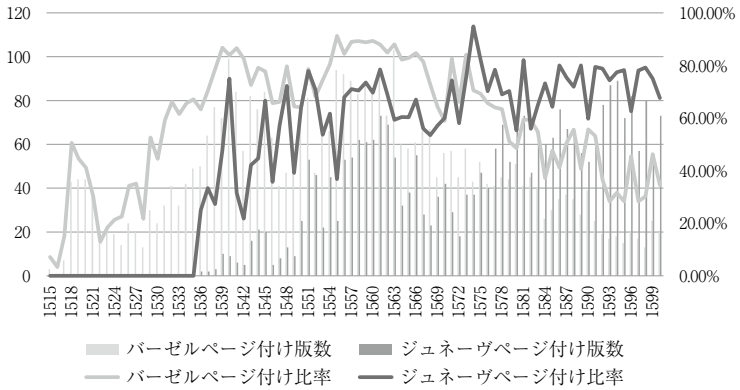
ジュネーヴでページ付け本に近代的標題紙を最初に備えた例は、デュ・ボワが1540年に刊行した次の３書である。アウグスティヌス（Augustinus, Aurelius, 354-430）『マルケリヌスへの精霊と言葉についての書』（Liber de spirito et litera ad Marcellinum）（GLN 1341）、サドレート（Sadoleto, Jacopo, 1477–1547）『ジュネーヴの議会と人民に送られた書簡：ジャン・カルヴァンの返信付き』（Epistre envoyée au Senat et Peuple de Geneve. Avec la Response de Jehan Calvin）（GLN-28）、サドレートの同書ラテン語版（Epistola ad senatum populumque genevensem. Calvini responsio）（GLN-27）である。これらはいずれもページ付け本であり、著者名、書名、印刷地、印刷者名、印刷年を明記した標題紙が備えられていた。なお、これら３書にはいずれもコロフォンがある。翌年にもデュ・ボワはカルヴァン（GLN-37）、聖アンブロシウス（Ambrosius, St.）（GLN-1348）、ヨハネス・クリュソストモス（Johannes Chrysostomus, 407歿）（GLN-1353）の３書にやはり著者名、書名、印刷地、印刷者名、印刷年を明記した標題紙を付した。同年にジラールも『聖ヤコブの道義的書簡、簡略な説明付き』（Epistre cathorique de sainct Jacques avec une exposition breve）（GLN-5701）の標題紙に書名と印刷地、印刷者名、印刷年を記載した。本書にはコロフォンは付されていない。こうしてジュネーヴにおける近代的標題紙はページ付け本と結合したが、デュ・ボワは1541年にリヨンに移住したので、それ以降はジラールが近代的標題紙をページ付け本に散発的に備える

だけで、ジュネーヴではその普及に時間を要した。

10. バーゼルとの比較

スイス最大の印刷出版中心地であるバーゼルのページ付け印刷の発展と比較して、ジュネーヴの特質を明らかにしてみよう。バーゼルは1520年代にエラスムスが滞在して人文主義の中心地として発展したが、同時に宗教改革も進んで、ルター等のプロテスタント文献を積極的に刊行し、ジュネーヴとの文化的・宗教的な関係も少なくなかった。図６に示すように、バーゼルは1515年からページ付け印刷が始まり、1560年代まではページ付け本の比率が80％前後を推移してヨーロッパで最高であった。しかし、1570年代には70％から60％代に下降して、1580年代には50％を下回るようになり、1590年代には30％に達しない年もあった。その原因は、数葉の小冊の印刷物が多くを占めるようになったことである。一方、ジュネーヴは前述の通り50年代にページ付け印刷が発達して、1570年代にはページ付けの版数も比率もバーゼルを凌駕するようになり、1590年代まで70％前後を維持して、衰えなかった。

図６．バーゼルとジュネーヴのページ付け本の比率



バーゼルにおけるページ付け本の主な著者は、エラスムス等の人文主義者とアリストテレスやキケロ等の古代著述家が上位20人中で11人を占めており、人文主義書がページ付け本の主流である（表３）。１位のエラスムスは全体の版数が非常に多いため、ページ付け本の比率は下がるが、ページ付け本の版数は圧倒的に多い。２位のアリストテレスはページ付け本の比率が高い点が特徴である。12位のオウィディウス、13位のウェルギリウス、17位のツァジウス、18位のティクシエは特に比率が高い。一方、プロテスタントの指導者や神学者は６位のフラキウス、７位のメランヒトン、９位のグリナエウス、10位のルターの４人に過ぎない。メランヒトンとルターの著作はバーゼルで200版以上刊行されたが、ページ付け本の比率は低い。ルターの著作のページ付け本が少ない原因は、ゴシック体活字を用いたドイツ語書にページ付け本が少ないことと関係していると考えられよう。その他の学者では、３位のミュンスターはバーゼル大学教授であり、ヘブライ語学者で地理学者、改革派神学者である。彼の著作が学者の中でも非常に多い理由は、主著『世界誌』（Cosmographia）がドイツ語書で初の世界地誌として広く読まれたことが要因であった。

なお、バーゼルの上位20位には漏れるが、統一タイトルの検索では、バーゼルでは『聖書』（Biblia）では173版ヒットするが、そのうち言語の区別なく『新約聖書』（Biblia, NT）は42版であり、その中でページ付け本は24版、57.14％である。『ローマ法大全』（Corpus iuris civilis）では全部で23版ヒットするにすぎないが、そのうち20版がページ付け本であり、ジュネーヴに比べて出版数は少ないが、ページ付けの比率は高い。

ジュネーヴでは上述のように、カルヴァン等のプロテスタント指導者・神学者が８人含まれており、カルヴァン、ベーズ、ヴィレ、ダノーは全版数が多くてもページ付け本の比率が70％以上と高い傾向にある。一方、人文主義者および古代著述家は表２中の９位のアンリ・エチエンヌ２世、11位のキケロ等わずか５人であり、15位のスレイダヌス以下は出版数も少ない。アンリ・エチエンヌ２世が人文主義印刷業者として1570年以降に積極

表３　バーゼルのページ付け本の主な著者

順位	著者名	全版数	ページ付け版数	ページ付け本の比率
1	Erasmus, Desiderius, 1466-1536	673	294	43.68％
2	Aristoteles, 前384-322	87	66	75.86％
3	Münster, Sebastian, 1489-1552	129	61	47.29％
4	Paracelsus, 1493-1541	76	59	77.63％
5	Cicero, Marcus Tullius, 前106-43	90	54	60.00％
6	Flacius, Matthias, 1520-1575	68	49	72.06％
7	Melanchthon, Philipp, 1497-1560	281	48	17.08％
8	Vigelius, Nicolaus, 1529-1600	50	41	82.00％
9	Grynaeus, Johann Jakob, 1540-1617	106	38	35.85％
10	Luther, Martin, 1483-1546	203	36	17.73％
11	Freig, Johannes Thomas, 1543-1583	82	33	40.24％
12	Ovidius Naso, Publius, 前43-17	41	32	78.05％
13	Vergilius, Polydorus, 1470-1555	38	32	84.21％
14	Vives, Juan Luis, 1492-1540	93	29	31.18％
15	Crusius, Martin, 1526-1607	53	28	52.83％
16	Galenus, 129-199	53	28	52.83％
17	Zasius, Ulrich, 1461-1535	34	28	82.35％
18	Tixier, Jean, 1480-1524	34	27	79.41％
19	Châteillon, Sébastien, 1515-1563	69	26	37.68％
20	Wecker, Johann Jacob, 1528-1586	40	26	65.00％

的に人文主義書を刊行したが、その影響は限定的であった。その他の学者では８位のオトマンが上位におり、比率も高い。オトマンはバーゼルでは上位20位以下であり、全版数は29版、ページ付け版数は23版である。

以上のような比較から、ページ付け印刷の観点からは、ジュネーヴではプロテスタント指導者・神学者の著作が圧倒的に大きく、人文主義書は極めて限られていた。一方、同じプロテスタントの都市であるバーゼルは人文主義の影響が圧倒的に大きく、プロテスタントの指導者・神学者の著作へのページ付けは限定的であった。両都市は印刷出版に大きな影響を与え

た人文主義と宗教改革という16世紀の二大潮流に対して対照的である。

11. まとめ

ジュネーヴでは他の印刷出版中心地より遅れて1536年からページ付け印刷が行われたが、他の中心地で一般的な傾向である人文主義の影響ではなく、改革派の影響であった。1540年にページ付け本に近代的標題紙が備えられるようになり、一部では奥書が消滅する現象も現れたが、近代的書物形態の要素が安定的に備わるのはページ付け印刷が発展する1550年以降であり、他の中心地と比べて遅かった。しかし、1570年代以降は全出版数、ページ付け本の版数、ページ付け本の比率でジュネーヴはバーゼルを凌駕した。バーゼルでは1580年代以降印刷出版業が衰退し、ページ付け本も減少していったが、ジュネーヴでは印刷出版業は世紀末に向けて着実に発展した。ジュネーヴでのページ付け本の圧倒的多数はカルヴァン、ベーズ、ヴィレ等のプロテスタント指導者・神学者の著作であり、バーゼルのように人文主義書が主流になることはなかった。この点がジュネーヴの大きな特徴であると言えよう。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP17K00454の助成を受けたものです。

付記：本稿は2020年度日本図書館情報学会春季研究集会（2020年 6 月 6 日オンライン開催）で発表した「16世紀中葉ジュネーヴにおけるページ付け印刷の発展について」（『2020年度日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』pp. 37-40）を大幅に改訂増補したものである。

注

(1) パラテキストとペリテキストについては、ジェラール・ジュネット著；和泉涼一訳『スイユ：テクストから書物へ』水声社、2001参照。

(2) Smith, M.M., The title-page its early development 1460-1510, London: The British Library, 2000, pp. 43-45; 拙稿「15-16世紀のイタリアの印刷本の特徴」『ヴァチカン教皇庁図書館展Ⅱ：書物がひらくルネサンス』印刷博物館、2015、

pp. 024-025.

(3) ニュルンベルクのハンス・フォルツ（Folz, Hans, 1435-1513）は1479年刊行の自作『ユダヤ人に対する詩人たちの戦い』（Krieg des Dichters wider einen Juden）（ISTC if00239510）の第１葉裏に、書名、著者名、印刷者名、印刷地、印刷年を含む近代的標題紙を備えた。Cf.: Smith, M.M., op. cit., p. 46.

(4) これまでのページ付け印刷の発展・普及に関する見解については、拙稿「西洋におけるページ付けの起源と発展過程について」『学術研究（人文科学・社会科学編）』66、2018、p. 67参照。

(5) 本研究で利用した16世紀印刷本の書誌データベースは以下の通りである。

Incunabula Short Title Catalogue, URL: http://www.bl.uk/catalogues/istc/

EDIT 16: Censimento nazionale delle edizioni italiane del XVI secolo, URL: http://edit16.iccu.sbn.it/web_iccu/ihome.htm

Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des 16. Jahrhunderts (VD 16), URL: https://www.bsb-muenchen.de/sammlungen/historische-drucke/recherche/vd-16/

e-rara, URL: https://www.e-rara.ch/

English Short Title Catalogue (ESTC), URL: http://estc.bl.uk/F/?func=file&file_name=login-bl-estc

LYON15-16: Bibliographie des éditions lyonnaises 1473-1600, URL: http://www.lyon15-16.org/

Bibliothèque de Genève, GLN 15-16, URL: http://www.ville-ge.ch/musinfo/bd/bge/gln/

(6) 拙稿「西洋におけるページ付けの起源と発展過程について」pp. 67-83参照。

(7) 拙稿「ページ付けの起源とアルド・マヌーツィオ：新しいぶどう酒は新しい革袋に入れ」『書物学』15, 2019, pp. 13-21; Koichi Yukishima, Pagination printed by Aldus Manutius, *Bibliothecae*, vol. 9, No. 1, 2020, pp. 1-21.

(8) 拙稿「16世紀前半バーゼルにおける近代的書物形態の発展について：ページ付け本の発展プロセスを中心にして」『学術研究：人文科学・社会科学編』67, 2019, pp. 71-84. なお、バーゼルにおけるページ付け本に近代的表題紙が備わったより早い例としては、1520年フローベン刊行のエラスムス『反蛮族論』（Antibarbarorum）（VD 16, E 1997, E 1998）がある。参照：拙稿「アントウェルペンにおける近代的書物形態の発展について」『学術研究：人文科学・社会科学編』70、2022（印刷中）。

(9) 拙稿「フランスにおけるページ付け印刷の開始と発展について」『学術研究：人文科学・社会科学編』68, 2020, pp. 51-73.

⑽　拙稿「16世紀ケルンにおけるページ付け印刷の発展について」『学術研究：人文科学・社会科学編』69, 2021, pp. 59-74.

⑾　宮下志朗『本の都市リヨン』晶文社、1989、pp. 253-254.

⑿　E.W. モンター著、中村謙二郎・砂原教男訳『カルヴァン時代のジュネーヴ：宗教改革と都市国家』ヨルダン社、1978、pp. 241-243.

⒀　Chaix, Paul, *Recherches sur l'imprimerie à Genève de 1550 à 1564*, Genève : Slatkine Reprint, 1978, pp. 48-50.

⒁　モンター、前掲書、p. 242, 注 1 (5)参照。

⒂　モンター、前掲書、p. 234.

⒃　モンター、前掲書、p. 266;　宮下志朗『本の都市リヨン』、pp. 298-304; 本間美奈「人文主義の舞台としてのジュネーヴ：詩篇歌とエンブレム・ブックの出版にみる」、大川四郎・岡村民夫編『国際都市ジュネーヴの歴史：宗教・思想・政治・経済』昭和堂、2018, pp. 153-171.

⒄　印刷地（Lieu d'impression）を 'Genève'、年代（Date）を '1501' から '1600' として単純に検索した結果である。ここでは、印刷出版地の筆頭を考慮していない。

⒅　拙稿「16世紀前半バーゼルにおける近代的書物形態の発展について：ページ付け本の発展プロセスを中心にして」pp.80-81.

⒆　e-rara, URL: https://doi.org/10.3931/e-rara-5691（2021-8-21参照）.

⒇　Chaix, P., op. cit., p. 227.

(21)　'Le Preux, Jean', CERL Thesaurus, URL: https://data.cerl.org/thesaurus/cni00011833,（2021-8-14参照）.

(22)　Gilmont, Jean-François, *Bibliographie des éditions de Jean Crespin 1550-1572*, Verviers : P.M.Gason, 1981.

（ゆきしま　こういち　教育・総合科学学術院教授）